

郷土博 通信

No.10

2017 秋



単弁六葉蓮華文軒丸瓦 (解説 6 頁)



CONTENTS

- | | | | |
|----------------|-----|------------------|---|
| ■ 単弁六葉蓮華文軒丸瓦 | 1 | ■ 単弁六葉蓮華文軒丸瓦について | 6 |
| ■ 展示室紹介 | 2~4 | ■ 第8回公開講座お知らせ | 6 |
| ■ 和三盆干菓子作り体験講座 | 5 | | |



第1展示室

荻田元廣の研究ノートから — 明治時代の古墳調査 —

荻田元廣は、明治10年(1877)、三野郡本ノ大村(現 観音寺市本大町)で生まれました。師範学校卒業後、同校で教鞭をとる傍ら柳田國男や喜田貞吉等著名な学者とも交流を深め、郷土史研究に多大な功績を残しました。

荻田が生前に収集した遺物や研究資料の一部が、当館に収蔵されています。今回の展示では、それらの中から遍照院裏山古墳、母神山古墳群、赤岡山古墳群の調査に関連する資料をご紹介します。

遍照院裏山古墳は、坂出市高屋町の雄山東麓に所在します。明治36年(1903)8月、松の伐採中に石室と遺物が発見されました。荻田が現地で確認したところ、石室の床は石が敷き詰められており、その上には細土が堆積していました。須恵器や勾玉、管玉、青銅鏡(図1)、馬具等が出土しています。

母神山古墳群は観音寺市の粟井町、池ノ尻町、木ノ郷町にまたがる母神山山麓に所在し、三豊平野では最大級の古墳群で、3つの支群に分けることができます。古墳は6~7世紀にわたって築造され、かつては70基を超えていたともいわれています。荻田の調査資料が残されているのは、千尋神社支群に属する真鍋塚・久米塚・久保田塚です(図2)。

明治38年(1905)1月、荻田は依頼を受け真鍋塚・久米塚の発掘調査を行いました。真鍋塚は既に石室が崩壊していたものの、久米塚は横穴式石室がほぼ手つかずの状態に残されており、須恵器、鉄製の刀や鐔、鉄鏃、耳環等が出土しています(図3)。久保田塚は久米塚発掘の数日後に土地所有者が自身で発掘し、その報告をまとめた荻田の資料が当館に残されています。なお、久米塚は平成7年(1995)に観音寺市教育委員会が発掘調査を行っており、古墳の規模等その詳細が明らかになりました。

赤岡山古墳群は、観音寺市大野原町中姫にある低い丘陵上に位置します。明治38年3月、古墳のある土地が開墾されているとの情報を得た荻田が現地に赴いたところ、既に石室はほとんど崩された状態であったようです。この時調査した古墳の具体的な位置や数は不明ですが、出土した須恵器から古墳時代後期の古墳であったと推測されます。

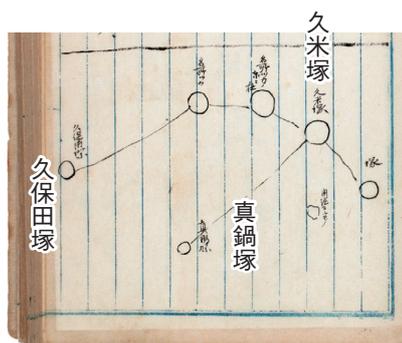
かつては20数基の古墳が分布していたと伝えられている赤岡山古墳群ですが、現在、唯一残されている古墳は直径約24mの円墳で、竪穴式石室をもつ古墳時代中期の古墳です。荻田が調査した古墳に先行するもので、赤岡山古墳として県史跡に指定されています。

荻田元廣の高い学術的意識をもって調査研究されたさまざまな資料は、100年以上経た今も私たちに貴重な情報を与えてくれます。

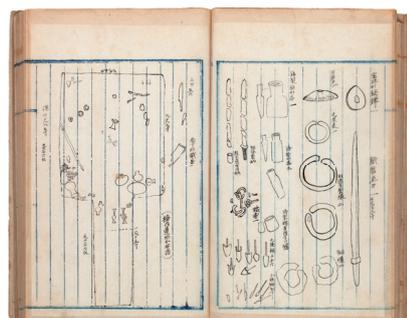
(宮武 尚美)



▲図1 青銅鏡
遍照院裏山古墳出土
復元径 9.2cm



▲図2 古墳分布図 『讃岐史料 雑之一』



▲図3 久米塚出土品スケッチ及び
石室内遺物分布図
『讃岐史料 雑之一』



第2展示室

久米通賢の足跡をたどる — 阪出墾田之碑 —

▲「阪出墾田之碑」全景
(平成3年以前に撮影)

久米通賢は62年の生涯において、天文測量・銃器開発・土木事業・経済政策等幅広い分野で才能を発揮し、結果を残しています。本展では通賢の偉大な足跡を様々な資料によってたどります。そのなかの一つである「阪出墾田之碑」の拓本についてご紹介します。この拓本は明治45年(1912)6月、坂出尋常小学校で開催された『久米通賢居士遺品展覧会』に出品されています。このことから明治時代に採拓されたと思われ、当時の碑面の状態を知ることのできる貴重な資料です。

「阪出墾田之碑」は、文政12年(1829)に坂出墾田の一定の完成を記念し、菅原神社境内(坂出市京町)に高松藩主松平頼恕によって建てられました。碑文には坂出開墾に至った事情、久米通賢の人柄や仕事ぶり、完成後のひらかれた土地、なかでも良質の塩を産み出す塩田の様子が刻まれています。そのことから碑の建立が墾田事業の成功だけでなく、開墾を建言し開発に力を尽くした通賢の功績をたたえ、永く伝えることを意図していたことが分かります。

江戸で製作された碑石は、縦214cm、横135cm、厚15~20cmの大きさと花崗岩の自然石を台石としています。碑石に使われている石は、仙台石(稲井石)と呼ばれる宮城県石巻市稲井町産の黒灰色の砂質頁岩であると思われます。この石は長尺の石材が採れることから、江戸時代から現代まで碑石として多く利用されてきました。

碑面には、丸彫で約1000字が刻まれています。この撰文は高松藩の儒者岡内棟、書を当時一流の書家として知られた加賀藩の河三亥(市川米庵)に依頼し、刻字を行ったのが廣群鶴、群亀父子です。廣群鶴は廣瀬群鶴の略字名で、東京谷中で江戸から昭和まで続いた石工歴代の名乗りです。当碑文は、5代群鶴の仕事であることが建碑の年代から推測されます。5代群鶴は、台東区源空寺に建立された伊能忠敬の墓碑銘や荒川区素盞雄神社の松尾芭蕉画像碑等、今に多くの作品を残す名工でした。また墨田区にある墨多三絶の碑は、群亀との共作として知られています。

現在は碑の保護の為、覆屋と柵が設けられています。この拓本を鑑賞いただくことで、刻まれた碑文字のすばらしさだけでなく、後世に伝えようとした碑文に込められた人々の想いを、じっくりと味わっていただけるのではないのでしょうか。

この他、各種の測量器具、武器類、塩田関係の地図や文書等を展示しています。久米通賢の多様な業績を知っていただければ幸いです。

(廣瀬 永津子)



▲「阪出墾田之碑」拓本 (縦189.6cm×横117.5cm)

【参考文献】

- ・小山一郎 『日本産石材精義』 龍吟社 昭和6年
- ・『坂出市文化財便覧』 坂出市教育委員会 平成12年
- ・黒川真頼 前田泰次校注 『増訂 工芸資料』東洋文庫254 平凡社 昭和51年
- ・加藤勝丕 「御碑銘彫刻師廣群鶴のこと」『MUSEUM』547号 東京国立博物館 平成9年



第3展示室

江戸時代の医学書 — 養生、鍼灸、本草、博物、そして西洋医学 —

誰にでもおとずれる病や死。

誰もが、健やかに長生きすることを望み、穏やかに最期を迎えることを願っているのではないのでしょうか。

神に治癒を祈る「祈療」に始まったであろうわが国の医療は、やがて大陸から伝来した医学に学び、日本独自の医学として発達した「漢方」を基盤として、時代とともにさまざまに変化し、また変遷してきました。

江戸時代には、幕府や武士が中心であった医療や医学が民間にも広がり始め、庶民にとっても身近なものになりました。養生、鍼灸、本草、博物などの医学書の刊行が盛んに行われるようになり、技量に優れた町医者、村医者も多く現れました。しかし、医者診察料も医薬品も高額で、庶民が気軽に利用できるものではありませんでした。そのため庶民は薬草を煎じた湯を飲み、鍼を打ち、灸を据え、湯治に出掛けるなどして、健康の維持に努めていたようです。また、後期には蘭学を中心とする西洋医学が浸透し始め、洋学への転換の基礎が固まりました。

今回の展示では、^{かいばらえきけん}貝原益軒によって書かれた養生（健康法）についての指南書である『養生訓』天保5年（1834）刊、後藤椿庵による灸法書である『^{がいきゅうつうせつ}艾灸通説』宝暦12年（1762）刊、平賀源内著の本草・物産解説書である『^{ぶつるひんしつ}物類品隲』宝暦13年（1763）刊、^{うだがわんさい}宇田川榛斎による日本最初の銅版解剖図である『^{いほんていこうないしやうどうほん}医範提綱内象銅版図』文化5年（1808）刊など江戸時代に刊行された医学書をご紹介します。

また、坂出の医家に伝わった医学書やその写本、記録などをはじめ、合田求吾が、長崎で吉雄耕牛から学んだ蘭方医学に関する講義録をまとめた『紅毛医言』や『紅毛医述』、さらに蘭学や暦算などに通じ大坂の間重富に学び、久米通賢とも親密に交わったとされる伊藤宗介（弘）が遺した医学書やオランダ語の文法書である『^{そくぶんきんのうぜん}重訂属文金囊全』などもご紹介いたします。

郷土の医人たちが遺したこれらの資料からは、学問への情熱、医者としての矜持が伝わってくるようです。

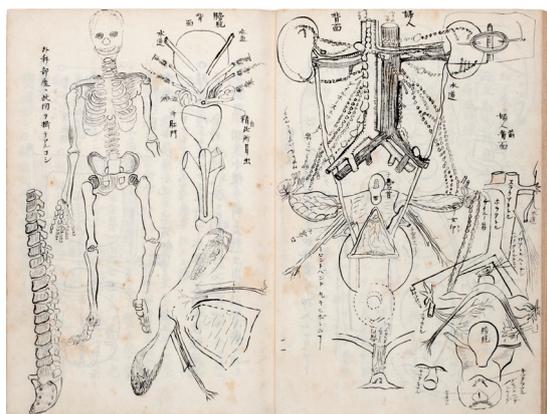
（吉久 由紀子）



▲『養生訓』



▲『医範提綱内象銅版図』



▲『紅毛医述』（写本）



和三盆干菓子作り体験講座

和三盆干菓子作り体験講座を終えて

上原 あゆみ

半年ほど前、鎌田共済会郷土博物館の方より鎌田家で所蔵されていた菓子木型の展示にあわせて、実際にそれらの木型で和三盆干菓子を作り、一緒に展示できないかというご相談を受けました。聞くと鎌田家で100年ほど前から所蔵されていたものとのこと、どのような木型かととても興味が湧きました。その後、博物館の方が木型を持ってきてくださり、それらの木型を一目見た瞬間、あまりの美しさに心を奪われました。さまざまな種類の木型があり、鶴亀、千鳥といった伝統的なものから直径2センチほどの小さくかわいらしいデザインのものまで、保存状態も良好で上質な桜材で作られた木型は時を経て黒く光沢を放っていました。



実際にこれらの貴重な木型で和菓子を作らせていただけると、胸が高鳴りました。はるか昔、どんな人がこの木型を注文し、どんな職人がこれらの木型を彫り、そしてどんな和菓子職人がお菓子を作ったのでしょうか。そしてまた、どんな人たちがこれらの和菓子を楽しみ、四季を愛でたのでしょうか。木型を通して明治時代に思いを馳せ、そして100年以上の時を経て、私の手元に届いた木型を愛しく感じました。そして実際に和三盆を木型に詰めて出してみると、それらの和菓子は、草花や生き物を模したものだけでなく、とても昔のものとは思えないモダンで遊び心に溢れたデザインのものもあり、改めて先人のユーモアや高いセンスを感じ、感動せずにはいられませんでした。

和菓子作りには欠かすことのできない菓子木型が、今、木型職人の激減により存続が危ぶまれています。そんな全国に4、5人といわれている木型職人を父に持ち、その技を身近に見てきました。菓子木型の魅力をひとりでも多くの方に伝えたいという思いで、菓子木型を使った和菓子作りのワークショップを各地で開催しています。

今回、鎌田共済会郷土博物館での干菓子作りワークショップにも親子でたくさんの方が参加してくださいました。初めて木型を手にする方がほとんどで、和三盆を木型に詰め、鯛や亀、金魚にひまわりなどの形がコロんと出てくると歓声が上がリ、みなさん楽しんで菓子木型に触れていただけたと思います。

日本の伝統的な文化である美しい菓子木型が後世に継承されていくことを強く願っています。

豆花（高松市花園町）代表



▲体験講座風景(平成29年7月29日)

『単弁六葉蓮華文軒丸瓦』について

(表紙解説)

わが国で初めての瓦葺き建物は、『日本書紀』によると飛鳥寺(奈良県明日香村)で、推古天皇4年(596)に創建されました。朝鮮半島の百濟から瓦職人が渡来し、製作技術を伝えました。以降、各地で寺院が建立されるようになると、瓦づくりも広まっていきました。香川県における最古の寺院は、650年頃に創建の開法寺(坂出市府中町)、あるいは妙音寺(三豊市豊中町)と考えられています。

古代の軒丸瓦の文様は、ほとんどが蓮の花をモチーフにした蓮華文です。泥の中から美しい花を咲かせる蓮は仏教の世界観と重なるため、その象徴として瓦や仏具等によく使われています。

表紙の瓦は^{かわらやま}瓦山窯跡(丸亀市飯山町)から出土したもので、700年頃に製作されたものと推定されています。3つに割った子葉を持つ花卉や、花卉と花卉の間に菱の実状の文様を配置するなど、独特の蓮華文が特徴的な軒丸瓦です。

昭和8年(1933)4月、付近を開墾中に窯跡が発見され、当館の職員が調査に赴きましたが、既に窯は破壊されており、窯壁の破片や瓦が採集されたのみでした。瓦の文様などにより、南西へ約3km離れた^{ほうくんじ}法勲寺(丸亀市飯山町)に供給されたものと推定されています。

法勲寺は江戸時代の初めには高松城下へ移り、弘憲寺(高松市錦町)と改称し現在に至ります。飯山町の元々お寺があった場所には、古代寺院法勲寺の礎石が残されています。

(宮武 尚美)



▲単弁六葉蓮華文軒丸瓦 瓦山窯跡出土

INFORMATION

- 鎌田共済会郷土博物館第8回公開講座
「江戸中期の讃岐の名医 合田強」
 — 『解体新書』の以前に書かれた『紅毛医言』—
 平成29年**10月28日**(土)
 13:30~15:00(開場13:00)
 会場: 鎌田共済会郷土博物館2階講堂
 講師: 板野俊文(いたのとしふみ 香川大学名誉教授)
 【申込10月1日(日)から、先着40名、参加無料】

電話・FAXかHPのフォームからお申込み下さい。
 電話: 0877-46-2275 FAX: 0877-45-0035
 HP: <http://www.kamahaku.jp/>

鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分
 岡山から…快速マリンライナーで約40分
 JR予讃線坂出駅から徒歩5分
 ※駐車場あり

開館時間: 午前9時30分~午後4時30分(入館は4時まで)

休館日: 月曜日/祝祭日

夏季特別(8月13日~15日)

年末年始(12月29日~1月4日)

入館料: 無料



▲蓮の花